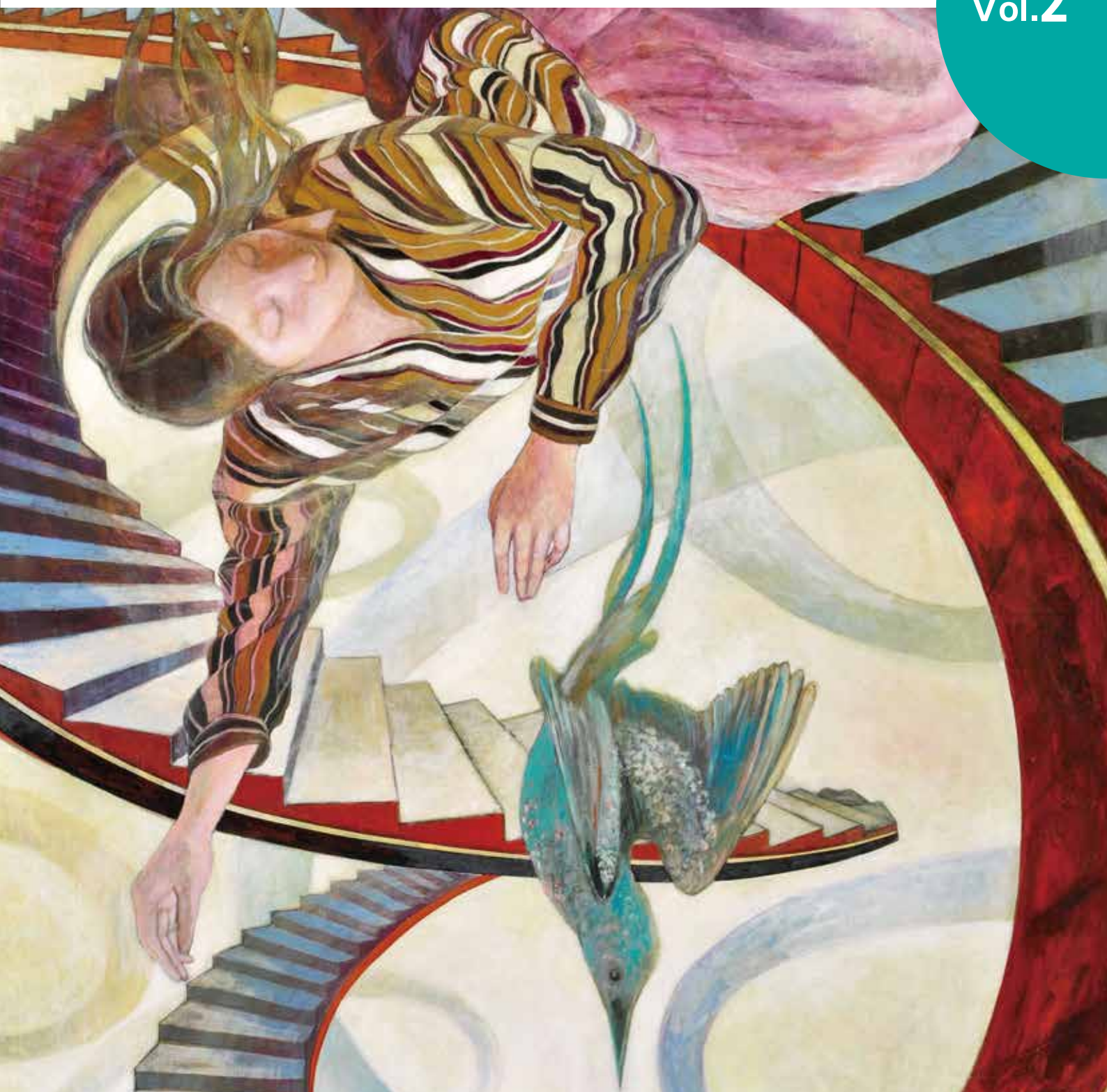


現代教育学部広報誌

2020年11月

EDUCATUS

Vol.2



中部大学



現代教育学科 講師 味岡 ゆい AJIOKA Yui

博士(応用生物学)(中部大学)

専門分野:生態学

研究テーマ:遺伝的多様性ノネットロスに向けた里地里山指標種の生育地環境評価

授業科目:理科概論、科学教育演習、理科実験

理科教育の これからの考える

現代教育学科 味岡 ゆい 講師

新型コロナから得た 理科教育の課題

2020年5月、これまでの対面授業とは違う新しい講義形態、遠隔授業が始まった。講義・演習科目はZoomによる双方向の対面講義、大学の講義システムCoursePowerやGoogleシステム(Classroom・GoogleDrive・GoogleForm)を活用した資料配布や課題提出により、従来の講義方法に近い環境を目指し、講義に当たった。しかし、実験科目は、学生自身が考え、行動し、実行し、知識・技能を深めていく科目であり、遠隔講義でできることは限られた。これからの理科教育でできることは何か考えていく。

これまで…

理科教育は、物理(エネルギー)・化学(粒子)・生物(生命)・地学(地球)の4つの分野(領域)から成り立っているが、今回は生物分野に絞って話を進めていく。生物はその名の通り、「生きものを教える」科目であり、生物の形態(つくり)・生理(はたらき)・生態(くらし)・系統(つながり)について学習する。学習指導要領(小学校2020年度から、中学校2021年度から開始)の改訂により、生物分野の学習内容は「生命に関する自然の事物・現象を主として多様性と共通性の視点で捉えること」、そして「遺伝子>細胞>個体(種)>生態系」の階層性により小・中・高と学校段階が上がるにつれ、内容が充実することとなった。

私は以前より、学生には書籍や教科書に載っている一方向から見た限られた生物のすがたではなく、ありのままの様子を観察してほしいと思い、キャンパスを教材フィールドとして活用し、できる限り校内に生息する生物を講義で用いてきた。また生物は、生物そのものの情報にとどまらず、その生物を含む生態系を評価する指標ともなり、生態系レベル

における環境状態や生態系に生息する同種間・異種間の多様性と共通性について、学生へ問い続けてきた。本項では、キャンパスの教材を利用した授業の一端を紹介する。

(1)昆虫を知る

7月下旬、夏の到来を感じさせるセミ(カメムシ目セミ科)の多様な鳴き声が、種によって異なる時間帯に聞こえ始める。セミの幼虫は数年間土の中で樹液を吸って少しずつ成長し、羽化に適切な環境が整ったとき、土壌から出て、脱皮し成体になる。この脱皮が「セミの抜け殻」と呼ばれ、その殻の生物が、発見場所付近で生きていた生息環境を示す大事な証拠となる。



図1. セミの抜け殻(右:アブラゼミ、左:クマゼミ)

2013年ツクツクボウシ・アブラゼミ・クマゼミ、4年後の2017年はアブラゼミ・クマゼミの抜け殻がキャンパス内で確認できた。発見されたセミの中でもクマゼミは南方系のセミと言われ、市街地の木がまばらな乾燥した環境でも十分に産卵・ふ化・幼虫の成長が可能という地域の都市化進行の目安とされ、春日井市の都市化を知る手がかりとなる。また、セミの抜け殻そのものの構造(前脚の鋭さ、腹筋や複眼の様子など)を観察しても、セミの生態を知る手がかりとなる。生物の生きた痕跡から多様な見方ができることを知るきっかけの教材になればと思う。

(2)土を知る

10月中旬、イチヨウが色づき始めた頃、71号館の裏手にある林を活用し、土壌生態系の調査を行う。生態系は食物連鎖でつながっているが、土壌生物は落ち葉などの植物遺体の有機物を細碎し、分解者である土壌微生物の働きを助け、消費者でありながら、分解者的な働きも担う。

土壌生態系における生産者、消費者、分解者の繋がりを正しく認識する適応な教材といえ、学生にとって土壌形成の過程から土壌生物間のつながりについて知る良い環境が整っている。調査は全部で3つ。1つ目は土壌を深さ30cm掘り、土壌生物が生息する土壌層の抽出、2つ目はその土壌を使用し、土壌微生物を、3つ目は土壌動物(大形と中形土壌動物はハンドソーティング法、小形土壌動物はツルグレン装置で採集)の存在を調査する。2016年は14種、2017年は17種と15種前後の土壌動物を確認した。土壌動物は自然環境の破壊や人為的な干渉といった環境の変化を敏感に感じ取り、生息場所を変えるため、その土地の自然の豊かさ(自然度)を知る手がかりにもなる。学生が実体顕微鏡で土壌動物の姿を初認したときは、実験室内で必ず悲鳴があるが、翅、触角、脚などを認識するにつれ1つの生物であると認識するのか、かわいく見えてくるということから不思議である。

これから…

2010年文部科学省が教育の情報化ビジョンを公表し、2020年GIGAスクール構想の実現に向け、児童生徒1人1台端末は令和の学びのスタンダードであると発表した。また同年4月より、小学校では新学習指導要領が開始し、小学校理科ではプログラミングされた生活に潜む科学技術をMESHを活用してそのしくみを学習すること、英語ではQRコードが教科書に記載され、専用アプリによる読み込みで英会話が視聴できるなど、教育現場ではICT教育が推進されて

いる。このようなモノの操作・状態の把握・モノ同士の対話といったIoT技術を活用し、キャンパス教材フィールドと教育を繋げるにはどうしたら良いか、アイデアの域であるが提案したい。

(1)生物の生態・系統 = <IoT> = 教育

キャンパスで教材観察できるメリットがある一方、生物は時期を外してしまうと目的物の観察は難しくなる。特に本年の4~7月は遠隔授業であったため、授業資料として例年と同じ教材の提供を学生に行ってきたが、その生物が生息する環境を学生自身がその場に立ち感じたかは定かではない。生物の生態や生態系内のつながりを観察できるように、キャンパス内の位置情報と生物情報をつなげ、見える化することで、時期を問わず、キャンパス内の季節変化を提供できる新たな教材フィールドができると考える。

(2)生物の構造・機能 = <IoT> = 教育

実験は、学生自身が自分で体験し気づくことで学びとなるが、実験機器や器具のない状況下では、体験以前の学びすら難しいものとなってしまふ。目視できない生物の微細な顕微鏡画像や実験過程だけでなく、実験の前処理などの動画ファイルをQRコードで授業資料に付加させることで、場所を問わず、学習に沿った実験観察を視聴可能なデジタル資料の作成ができると考える。



図3. 令和2年(2020年)度発行の教科書(左:理科小6、右:英語小6)

海外から注目される日本型教育を特別支援教育分野で展開

近年、「日本型教育」が注目されるようになり、文部科学省や外務省が中心となって諸外国への海外展開が進められています。教科教育だけでなく、学校生活全般を通して全人教育に取り組む日本の教育、例えば、給食当番や清掃活動、部活動などが学校教育として行われていることについて注目が集まっています。OECD教育政策レビューにも、PISA2015調査などでのトップクラスの成績は、学校での学習を促進する環境にあると言われてしています。すなわち、教師の質の高さだけでなく、生徒が積極的に学校に関わり、保護者が教育に協力的で学校外での学習にも経済的な支出をし、さらに地域も様々な形で学習をサポートするということが一体となって行われていることが関係していると考えられています。

一方で、こうした日本の教育の仕組みが教師の多忙化や児童生徒の幸福度や不安についての課題を生んでいるということも言えます。今後の日本の教育を考える上で、海外から注目される強みを再認識し、さらに課題解決に向けて自分たちの教育活動を見つめ直す機会として、海外と



現代教育学科 教授 伊藤 佐奈美 ITO Sanami
博士(教育学)
前 職: 特別支援学校長
専門分野: 特別支援教育(障害児教育、キャリア教育、インクルーシブ教育)
研究テーマ: 障害児の自己理解に関する研究、障害児のキャリア教育・キャリア発達、特別支援教育における日本型教育の海外展開
授業科目: 病弱児の教育、肢体不自由児の教育、教育アセスメント、教職実践演習、マイクロティーチング、児童教育課題研究

障害者の自立と社会参加を推進するための取組

－ 特別支援教育における日本型教育の海外展開とタイ国との交流 －

現代教育学科 伊藤 佐奈美 教授



の交流を発展させていくことは意義深いと感じています。

ただ、残念なことに、文部科学省の日本型教育の海外展開推進事業のパイロットプロジェクトには特別支援教育分野の実践は取り上げられていません。しかし、実際は、すでに2010年ごろから、愛知県内の特別支援学校にタイ国から特別支援学校の教師が毎年訪れ、帰国後に日本の教育を取り入れた様々な教育活動を展開しています。2012年からは愛知県の教師もタイ国を訪れ、セミナーを実施したり、意見交換を行ったりしてきました。2013年にはタイ国教育省の使節団が日本の教育や就労関連の事業所等を視察し、その後2017年には、タイ国教育省主催の「特別支援教育に関する国際シンポジウム」がバンコクで開催されました。日本の文



部科学省も共催し、シンガポール、ブルネイ、フィリピン、ベトナムなどの東南アジア諸国に加え、イギリスと日本も参加しました。

基調報告として日本からも国立特別支援教育総合研究所や岐阜大学からの報告がありました。日本への数年にわたる視察をもとに、国際シンポジウム開催が進められてきたこともあり、日本の教育への関心の高さがここでも感じられました。



日本の教育を タイ国の特別支援学校で

タイ国では、日本の教育を積極的に、また迅速に取り入れている様子を見ることができます。毎年日本を訪れていたロブリー特別支援学校では、校舎に入るときの上靴への履き替えの習慣を手洗いなどの衛生習慣と共に取り入れたり、教室に時間割表を作成して掲示したり、日本では日常的に行われていることに関心をもって取り入れています。

また、日本とは学校予算の仕組みが違い、学校長の裁量で施設設備が比較的容易に整備できることから、日本で

視察した農業の作業学習を数か月後には広大な農地を確保して実施されていたのには驚かされました。

これは、タイ国では、様々な基金や寄付を学校へ導入することが容易にできるからです。毎日の給食なども篤志家からの寄付で賄われており、食事前に寄付してくれた人が紹介されていました。仏教国であるタイ国では、お布施や寄付の文化が根付いているのです。そうした基金をもとに、学校外の街中にカフェを作ったり、織機を日本から輸入したりして作業学習に取り入れています。日本では、公立の学校でこれだけの予算を確保することは大変なことです。



現代教育の先端をゆく II

障害者の自立と社会参加に向けた取組

学校段階から将来の就労や社会参加を目指して様々な作業種目を設定して学習する取組は、日本においても盛んに実践されています。また、円滑な社会への移行を目指し、企業内実習も高等部2年生段階から行われています。現在、日本では障害者雇用率の引き上げも追い風になり雇用促進が図られてきているところです。

しかし、タイ国では障害者に対する偏見や差別がまだ残り、企業内実習までは行われるようになったものの、就労に結びつくことは少ない現状です。

現在、タイ国では、特別支援学校の教師が中心となり関係機関との連携を図りながら、障害者の学校から社会への円滑な移行のための進路指導モデルの開発研究に取り組まれています。そこには、日本で従来から行われてきた進路指導、そして最近日本でも力を入れて取り組んでいるキャリア教育の視点や方法が取り入れられています。日本への視察を重ね、国際シンポジウム開催に尽力した



元ロブリー特別支援学校校長の Sujin Sawangsri氏は、キャリア意識は児童期の段階から始まり、学校においては児童生徒の職業や働くことへの意識と自己肯定感を高めるカリキュラムが必要であると述べています。また、日本の学校に配置されている進路指導主事のように生徒に合った職業開拓をし、様々な情報共有を図りながら生徒と企業や雇用主をつなぐ役割の職員や、日本で実践されている個別の教育支援計画や指導計画、卒業時の移行支援計画のようなサービスプランが必要であることを主張しています。

現在、日本で全ての学校段階で実践されているキャリア教育は、タイ国においても取り組むべき課題として認識され始めています。今後さらに、日本における研究や実践を進め、それを紹介しながら、共通する課題認識のもと、モデルプラン開発の研究を進めていきたいと考えています。

今後の課題

タイ国では、日本より7年も先んじて国連の「障害者権利条約」を批准するなど、法整備はかなり早期に進められてきました。しかし、実際の社会経済や教育の状況は、首都バンコクとそれ以外の地方との格差が大きく、地方では障害児が教育を受けられる環境も整えられていない現状があり、法令と現状の乖離が問題となっています。地方の障害者の発見と対応、一般の学校の教師の意識改革を進めることがタイ国の最重要の課題です。今後も交流を継続しながら、日本型特別支援教育の海外展開を進めていきたいと考えています。



コロナ禍での遠隔教育

現代教育学科 講師 伊藤 大幸 ITO Hiroyuki

博士(心理学)

日本教育心理学会2017年度優秀論文賞受賞 日本健康心理学会2016年度本明記念賞(論文賞)受賞



今般のコロナ禍では、感染拡大防止の観点から、国内の大部分の大学が遠隔授業の導入を余儀なくされました。本学も例外ではなく、例年より1ヶ月ほど遅れた春学期の授業開始時点では、基本的に全ての科目が遠隔授業として実施される形になりました。その後、感染がいったん落ち着いた6月には実験や実習を伴う一部科目で対面授業が再開されましたが、大部分の科目は春学期を通して遠隔で実施されました。秋学期も半数以上の科目で遠隔授業が継続されています。

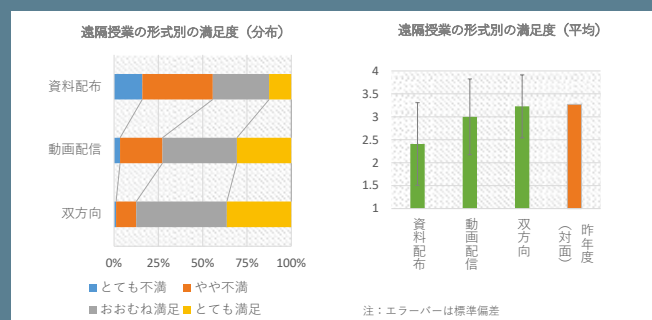
こうした前例のない事態における学生の学びや生活の状況を把握するために、春学期の終わり(7/29)に現代教育学科の1年生を対象にアンケート調査を実施し、88名から回答を得ました。その結果、遠隔授業の形態によって授業満足度に大きな違いが見られることが明らかになりました。遠隔授業の形態は、①ビデオ会議システム(Zoomなど)を利用した双方向型授業、②動画配信をともなうオンデマンド授業、③資料配布によるオンデマンド授業の3つに分けられます。こうした授業形態ごとの満足度を尋ねたところ、資料配布型の授業では約4割、動画配信型の授業では約7割、双方向型授業では約9割の学生が、「とても満足」または「おおむね満足」と回答しました。昨年度の全学における授業評価の結果と比較すると、双方向型授業のみが同等の水準でした。自由記述では、資料配布型授業について「課題が多いのに結果を返してもらえず、やる気をなくした」など、課題量の割にフィードバックがないことへの不満が多く見られました。

一方、動画配信型授業については「何度も動画を見直して理解を確認できるのがよかった」、双方向型授業については、「先生の発問や他の学生との討論で考えを深めることができた」など、授業形態のメリットを挙げる回答が大部分を占めました。授業形態による満足度の違いについては、他大学の調査でも同様の結果が得られており、双方向型授業では対面授業の満足度を上回るという結果も示されています(立教大学経営学部調査)。

私自身、Zoomによる双方向型授業を実施しましたが、大人数の講義では対面授業よりも良質な教育機会が提供できることを実感しました。アクティブ・ラーニングの重要性が叫ばれる昨今ですが、50名を超える規模の対面授業では、授業内で学生との相互作用を図ることは容易ではありません。学生に質問を投げかけても、一部の学生しか挙手しない、無回答や追従的な回答が多くなるといった問題が生じ、教室全体で議論を深めていくことは非常に困難です。しかし、オンライン授業では、発問に対してチャットで回答を記述させることで、全ての学生の考えを瞬時に把握できます。その中で興味深い回答や複数の対立する回答を取り上げて、詳細や根拠を説明させることで、議論を効率的に深め、全員参加のアクティブ・ラーニングを実現することができます。また、研究の結果について予想のグラフを書かせる、アンケートツールを利用して実際に実験を体験する、ブレイクアウトルームでグループ討論を実施する、遠方のゲストスピーカーに講演をしてもらうなど、学生のアクティブな学びを促す多様な工夫を容易に取り入れることができます。

こうした工夫は、実際に受講者の意欲や学習効果にもつながっています。私の担当科目では、毎回の授業の終わりに「300～1000字(超えてもよい)」を目安として、講義の内容をまとめる小レポートを課しましたが、回を経るごとに学生の記述量が増加し、春学期の最終講義における全受講者の平均記述量は目安の上限を大きく上回る1500字に達しました。例年の対面授業では、最も多い学生で700字程度でしたので、学生の意欲や理解度が大きく向上していることがうかがえます。

コロナ禍への緊急避難的な対応として始まった遠隔教育ですが、ICT技術の導入が主体的・対話的で深い学びの実現に貢献することを知らしめた点では、今後の大学教育の質を大きく向上させる機会にもなりえます。今後、教員間で実践知の共有・蓄積を図り、組織的な授業改善につなげていくことが期待されます。



3学部(現代教育学部・生命健康科学部・工学部)連携による保育者養成でのコロナ禍対策 ～サーモグラフィと血中ガス分析によるフェイスシールドとマスクの影響評価～

現代教育学部 講師 千田 隆弘、生命健康科学部 助教(実習講師) 堀田 清司、工学部 准教授 大嶋 晃敏・教授 伊藤 響

1. はじめに

本学では、コロナ禍に様々な対策をしながら学びの場を保障しています。ここでは、現代教育学部・生命健康科学部・工学部の連携の取組みを紹介します。

2. サーモグラフィシステムの開発

工学部創造理工学実験教育科では年間受講生1,500人超の講義があり、集団感染防止を目的に発熱異常者の検知を可能にするサーモグラフィシステムを開発しました。コロナ感染者には発熱症状があると当初から言われ、過去の新型感染症(SARS等)でも発熱者検知の重要性が知られていたためです。

システムの原理は、発熱体からの放射赤外線をセンサで検出し、熱画像(熱分布)として可視化する点です。「体温測定」ではなく「表面温度の熱分布」の可視化ですが、体表面温度は体温上昇に追従するため、発熱者の検知が可能になります。なお、巷には多くの体温測定器が溢れ、原理・性能も千差万別です。自分が使う測定器の性能を十分に把握しておくことはとても大切です。



3. フェイスシールドの考案

感染対策は、消毒に加えてマスク(透明マスク除く)着用が一般的で

が、マスクには、着用中の運動での死亡報告(中国)や、呼吸確保のために5歳以下は着用禁止(WHO)、表情も意思疎通の手立てである手話には不向き、などのデメリットもあります。一方、乳幼児の発語の発達には、大人が口元を見せる必要があるなど、教育には「表情」という非言語コミュニケーションが非常に重要です。

幼児教育学科では、クリアホルダー1枚で作ることができ、感染予防にも配慮しながら表情を伝えられるフェイスシールドを考案し、新聞にも掲載されました(6.11中日新聞)。WHOのいうように額から顎の下まで覆うことができるように工夫しました。掲載日当日から反響があり、現代教育学部WEBサイトでダウンロードができる型紙を紹介しています。

7月に幼稚園の年長児対象にお面として作ってみせたところ、喜んで着用する姿があり、9月には学生も自分のお面製作を行いました。油性ペンや折り紙を貼り付けることで、個性の光る作品となり「自分で作ることで愛着が沸いた」そうです。

4. 比較調査

フェイスシールドやマスクの着用時、非着用時を比較した場合、身体にはどのような影響があるのでしょうか。そこで、サーモグラフィと経皮血中ガス分析装置(TOSCA®)による計測を9・10月に、学生を対象に行い、各状態での体表面温度、血中CO₂、酸素飽和度、脈拍数を測定し、更に感じたことを尋ねました。

その結果、安静時/活動時の比較から、血中CO₂濃度の有意な上昇はみられませんでした。マスクではフェイスシールドと非着用よりも血中酸素飽和度が高くなり、フェイスシールドまたはマスクを着用して活

動すると、有意に脈拍数の上昇が見られました。また、安静時/活動時とも、フェイスシールドとマスクの着用は非着用よりも息苦しさを感ずる割合が有意に高まりました。

アンケートでは、フェイスシールドの長所「表情が見えて安心」/短所「視界の悪化」、マスクの長所「感染リスク軽減・安心」/短所「表情が伝わらない」「息苦しさ」が挙がっています。



5. おわりに

学部間連携によって、互いに新たな視点で教育に取り組めるようになりました。学生間交流もあり、ワンキャンパスならではの成果もありました(左から、大嶋先生、千田(編著者)、堀田先生)。



最後になりましたが、サーモグラフィシステムの設置等にあってご協力頂きました、工学部教育技術部の鈴木建司先生及び伊藤智幹先生に心より感謝申し上げます。

～学術交流協定締結校～ 中国北京首都師範大学の近況

「休校しても学びは続ける」をモットーにコロナと向き合う

－中国北京・首都師範大学の取り組みについて－

幼児教育学科 准教授 楊奕 YANG YI

国際交流委員 博士(教育学)

専門分野: 教育思想、教育史



本学は、今年8月に中国北京・首都師範大学と学術交流協定を締結することになりました。この協定によって、学生や教員の相互派遣、教育経験の共有や共同研究が可能となりました。今回の新型コロナウイルスに対する大学の経験は、互いに共有して考えることに意味があると思います。協定校となった首都師範大学のコロナ禍への対応について、首都師範大学就学前教育学院の院長 康麗穎先生にインタビューしました。以下に、その内容を紹介します。

大学と学院の行動方針と迅速な対応

2020年1月に中国武漢市で新型コロナウイルスの感染が確認されました。全国への蔓延を防ぐために、1月23日午前10時に武漢市はロックダウンされました。それを受けて、中国教育部(日本の文部科学省)は、旧正月休み中の1月27日に全国の小、中、高、大学の授業開始の延期を通告し、その2日後の29日には、「停课不停学」(休校しても学びは続ける)の方針を発表しました。その方針を受けて首都師範大学は、後期にオンライン授業実施体制構築に向けて、迅速に準備を整えました。

もともと大学には二種類の学習管理システムがあります。一つは普段授業に利用するいくつかの学内のシステム、もう一つは民間企業が運営する学外のシステムです。オンライン授業導入に向けて、複数の民間企業から、教育活動を支援するオンラインのプラットフォームや教育コンテンツの無償提供などの声明を出しました。首都師範大学では、学内・学外の二つのシステムの水準を大幅に改善して、学生の学修環境をごく短期間で整備することができました。

一方、教職員・学生の安全を第一に考えて、「安全自律・自己防衛」をモットーとし、一人ひとりの責任と節度ある行動を全校生に求め、感染拡大防止を徹底しました。

教員へのフォロー体制

大学の従来からの学習支援システムは、それまで積極的に活用する教員がそれほど多くいたわけではありませんでした。とりわけオンライン会議のツールを用い

て授業を行うという双方向型の授業は、ほとんどの教員が初めての経験で、戸惑いも多くありました。オンライン授業のシステムを使いこなせるために、教員への研修講座を2月中旬に数多く開講しました。大学のデジタルキャンパスセンター(情報支援センター)は、全教員対象にオンラインによる指導を行い、24時間体制で教員からの質問等に応じられるように教員支援体制を整えました。加えて、各学院(学部)単位が、教員の習得状況に合わせて補足的な個別指導も不定期的に行い、また、ICTに詳しい教員を中心に、教員同士が互いに教え合う学習グループを作って、新たな協力体制も生まれてきました。



学生への学修指導

学生に対しては、後期の授業はすべてオンラインで実施することを、冬休み中に各学年の担任を通して、全学生に連絡しました。遠隔授業に必要なアプリのダウンロードも担任や授業の担当教員の指導の下で、授業開始前に全部終わりました。

学生のオンライン授業の指導については、それほど難しくなかったようです。中国では、ICTは、中等教育段階から学校に導入され、教育に欠かせない手段の一つとして認識されています。2月初頭にネット環境に関する学院の調査が行われました。ほとんどの学生は自分用のパソコンを持っており、通信量にも問題がないことがわかりました。

また、学生の健康管理は徹底しています。2月から毎日検温を行い、当日の健康状況と行動歴を担任に報告しなければなりません。そして、各学院が学生・教職員の統計を大学に報告し、大学のホームページに毎日、感染状況のデータが公表されています。

新学期が始まって2週間が経ちました。今学校が再開し、オンライン授業も対面に切り替えました。大学の規定に従って、検温、行動歴のチェックなど毎日厳しく実施しており、教職員も一丸となって、安心できる学びの環境づくりに努めています。



キャンパス入構時に提出するもの

1. 合格通知表(新入生のみ)
2. 大学キャンパスへの入構許可書(部外者)
3. PCR検査結果(7日以内)
4. 健康コード
5. 学生証
6. 検温・顔認識

子どもたちの 小さな変化に気付くこと

特別支援学校教員

石川県立七尾特別支援学校 加賀 詩織
(現代教育学科 ※旧児童教育学科 2016年3月卒業)

中部大学に入学後、児童教育学科の先生より「何か一つ、続けて行う活動を」とのお話がありました。私は大学の相談室へ行ったことがきっかけで、障害のある方の外出支援のボランティアに4年間携わりました。この経験は、余暇の大切さに気付くきっかけとなり、楽しめる余暇を持つことは、将来に関わる大切なことの一つだと考えるようになりました。そこで、学校生活の中でも、子どもたちが楽しめる活動や遊びを増やしていくことが重要と考え、日々子どもたちと関わっています。

また、特別支援教育を専門とする先生のゼミに所属し、初めて教材や支援グッズを見た時には、どう使うのかと疑問でした。今では、目的や子どもに合わせて教材を使えるようになってきましたが、これからも一人ひとりの子どもに合ったより良い教材を作成できるようになりたいです。

「子どもたちの小さな変化に気付く教師」になることが、大学卒業時の私の目標でした。私は現在、特別支援学校に勤務して5年目になり、今年度は小学部1年生の担任をしています。毎日子どもたちと過ごす中で、少しずつですが変化に気付けるようになりました。しかし、気付いた後の対応や支援をどうするかの方が大切であり、難しいですがやりがいのあることだと今は思っています。どうすれば分かりやすいのか、自分からやりたくなるのか、何に困っているかなど、授業準備や支援方法、個別の対応で悩むことはたくさんあります。特に、1年目は子どもとの関わりに悩み、大学で学んだと思っていたのですが、支援方法をあまり知らないことに気付きました。そのため、職場の先生方に相談したり校外や自主的に研修を受けたりして学ぶ機会を増やし、解決の糸口を見つけられるように、現在も取り組んでいるところです。

子どもたちの「できた！」の笑顔や、成長が見られたときはとても嬉しく、やりがいを感じます。これからも学び続け、子どもたちが「分かった、できた、楽しい」と思える授業ができる教師になれるように努力していこうと思っています。



大学を卒業して 今だから思うこと

特別支援学校教員

和歌山県立きのかわ支援学校 澤村 紀一
(現代教育学科 ※旧児童教育学科 2014年3月卒業)



中部大学卒業後、私は故郷の和歌山に戻って、知的障害と肢体不自由併設の特別支援学校で働いています。支援学校には、教員だけでなく、介助員さんや看護師さんもいます。また、小学部・中学部・高等部の児童生徒とその保護者の方も含めると本当に多くの方が一つの学校に携わっています。

そんなコミュニティの中で、教師生活7年目を迎え、大学での学びについて今となっては感じることもあります。それは、今までの経験や知識が、いつ・どこで・どのような形で生きてくるか、学生時代には分からないかもしれませんが(私はそうでした……)、これから経験していくこと全てがあなたのためになる、ということです。だからこそ、何かの縁で進学した中部大学で、どんなことでもいいので、「今を頑張ること」の大切さを学生の方々に伝えたいと思います。

教員という仕事の魅力を伝えるのであれば、なんといっても“何が起るかわからないこと”です。いい意味でも悪い意味でも予想外のトラブルや出来事が毎日のように起ります。子どもや同僚と一緒にになって新しい発想で考えたり、困りごとを解決したりしていくことを、何より魅力に感じています。しかし一方で、人間関係や仕事の進め方で、悩むこともたくさん出てきます。そのような壁にぶつかった時に立ち向かえる力や多様な考えを受け止める力を、クラブ活動・アルバイト・ボランティア等を通して養ってください。

特別支援学校は周りとの協力なしでは仕事できません。大学でのクラブ活動やゼミでの活動が教員として働くための基礎になっていたのだと、今だからこそ感じる事ができています。大学入学時はどの学科でもいいと思っていましたが、今はこのような経験をすることができた児童教育学科で本当に良かったと思っています。この文を書きながら、私も気持ち新たにみなさんと一緒に頑張ろうと思っています。こんな気持ちになれる機会をいただきありがとうございました。

“自分らしさ”は あなただけのもの

千曲市職員(保育士)

杭瀬下(くいせけ)保育園 山田 大樹 (長野県)
(幼児教育学科 2018年3月卒業)

私が勤務する千曲市は人口約6万人、見渡す限りの広大な田畑やそびえ立つ山々などの自然豊かな環境、明治の開湯以来100年余り続く伝統的な温泉地が魅力です。

私が地元で就職を決めたのは、大好きなふるさとに恩返しをしたいという気持ちもありましたが、もう一つ大きな理由があります。それは、オンリーワンになれる環境だと思ったからです。

学生時代からピアノだけは本当に苦手でした。音階を調べ、一つ一つ記入して、右手から恐る恐る弾き始める…これを4年続けました。しかし、反対に体を動かすことは得意でした。体をダイナミックに動かして、汗をかきながら思いっきり遊ぶことができる。だからこそ自分の保育に強みを生かし、反映させることでオリジナリティを出すことができます。毎日の保育で、「今日は何して遊ぼうかな」と考えることができ、時には子どもたちと一緒に考え実行する。現場は流動的なので、うまくいかなかったり思い通りにならないことは日常茶飯事です。だからこそ反省し、明日の保育に生かすことができます。

抜群に勉強ができなくても、ピアノが弾けなくても、読み聞かせが苦手でも、子どもに寄り添うのが難しいと思っても、あなたは先生になれます。だから絶対に諦めないでください。この世に誰かと全く同じ保育ができる人は1人もいません。私が流れるようにピアノを弾けないように、みなさんも私のような保育はできません。大切なのは、オリジナリティを持たせることだと思います。皆さんも自分の良いところ、得意なことをたくさん見つけてください。そして、そんな自分を好きになれると良いなと思います。



「幼稚園の先生になりたい…」

保育教諭

学校法人道徳学園 のだ山幼稚園 高司 陽菜子 (大分県)
(幼児教育学科 2014年3月卒業)



私が初めてそう思ったのは、保育実習をさせて頂いた時でした。子どもたちと関わるのが楽しくて、新鮮な毎日。思うようにいかず落ち込む事もありましたが、その度に学科の先生方が相談に乗って下さり、励まして頂いたことは心強く、今でも感謝しています。保育実習は経験のある先生方の保育を側で学び、様々な子どもたちと触れ合える貴重な機会です。部分的でも自分の保育をさせて頂けるチャンスがあれば、失敗を恐れずに積極的に取り組むことが大切です。自分の反省点に気づくことも素晴らしい経験です。実習で得たことは、これからの人生の中できっと財産となっていくことでしょう。

私は大学卒業後、地元の私立幼稚園に勤めて7年目となります。憧れの幼稚園の先生という仕事に就きましたが、毎日楽しい事だけではありません。辛い事や苦しい事、くじけそうになる事も沢山あります。しかし、それは教育者として向上し続けている証拠です。現場にいると、日々反省することがありますが、課題を見つける事は教育に関わる仕事をする上で大切なことだと考えています。新任の頃、人前に出ることが苦手な私は、手が震える程、緊張していましたが、保護者の方と子どもたちの様子を伝え合ったり、成長を喜んだりする中でコミュニケーションをとっていくことの大事さや楽しさを感じられるようになりました。園とご家庭での様子を互いに伝え合ったり、子育てに関する困りや悩みを聞いたりして、一緒に子どもを見守りながら、各ご家庭の支援ができるように心掛けています。

一生懸命に子どもと向き合って苦労した分、その先には大きな感動や喜びが待っています。子どもたちの成長を感じ、一緒に笑い合っている毎日は何物にも代えられません。これからも将来を担っていく子どもたちのために努力し続けていきたいものです。

学部長からのメッセージ



現代教育学部 学部長
佐野 充

エボラ出血熱などのニュースが流れても、それは遠い国の出来事で、パンデミックという言葉もメディアが声高に叫ぶだけで現実味を帯びることはありませんでした。しかし、新型コロナウイルスの出現は私たちの暮らしや人間関係に大きな影響を与えています。コロナ禍で心が折れることもあるかと思いますが、「人生で大事なことは、成功することではなくて、転んだら起きて歩むことだ」は、世界一貧しい大統領と呼ばれたホセ・ムヒカ氏の名言です。起きあがった回数と人の強さは比例します。

～表紙の作品について～



現代教育学部 長尾 寛子 教授
博士(教育学) (図画工作科 担当)

研究テーマ: 絵画における時間表現
二紀会・準会員

Adalheidis : fallan III

(第73回二紀展出品作品(2019年)194cm×162cmキャンバス・アクリル絵具)

この作品は、安定感のない空間を自由に羽ばたき、落下していく女性を描いています。これ以前の作品では、建物の中や螺旋階段などを彷徨い歩く人物像を、色数を押さえて描いてきました。これらの絵の中の主人公たちは、迷路のような不思議な空間の中を、手探りしながら、しかし生き生きとした姿でどこまでも放浪していきます。

制作しているときは自分の感覚を信じ、頭に浮かんだ形象や色彩を描き続けるだけなのですが、改めて見直すと、それらは現在の状況を受け入れながら、一つの場所や意識にとどまらず、動いていくことに生きていく意味があると言っているようです。そのような思いを、描いた絵が気づかせてくれます。

2020年度現代教育学部行事予定

11月

7日(土) 第5回中部教育実践研究会

11日(水) 幼児教育学科 卒業研究作品・実技発表会

12月

26日(土) 第6回中部教育実践研究会

1月

23日(土) 卒業研究発表会

30日(土) 第7回中部教育実践研究会

2月

27日(土) 第8回中部教育実践研究会

3月

23日(火) 学位記授与式

27日(土) 第9回中部教育実践研究会



【現代教育学部 教育の理念】

乳幼児、児童生徒に対して温かいまなざしと愛情に裏打ちされた専門的な知識と技能を修得し、かつ自らの生きがいとして、継続的に自己の成長を追求する言行一致の教育者を養成します。

編集・発行

中部大学現代教育学部 広報委員会

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200

TEL 0568-51-4690 FAX 0568-51-4699

E-mail educa@office.chubu.ac.jp